

入学期を控えて

幼稚園では何をしたらよいか

瀬戸尊

春の陽ざしが日一日と濃くなるにつれて、入学期を控えた子どもたちのために、幼稚園では何をしたらよいかと考えることであろう。

あれもこれとも思うことの半分もしてやれなかったような一種のあせりにも似たものを感じるのは、いつもこの期に味う心持ちなのである。

一方、入園した当時からのことを思い返すと、子どもたちのすばらしい生長ぶりを、いまさらのように生々と感じられるのであるが。「それにしても、このままで小学校におくりこんじゃって果して大丈夫かしら……」と、とつおいつ思いわずらうというのが今頃の親であり、先生である。

幼稚園というところは、小学校に入学期のための予備校だと思ひこんでいる人々、それに対して、幼稚園は小学校と関係なく、独自の保育領域をもっているのだと考える人々があって、それぞれに保

育課程の運用に少し異ったニュアンスを漂わせているのはやむを得ないであろう。

このことは、小学校でも中学校でも同様なことが言えるようである。幼稚園の場合は「小学校に入学期のための」という極端な場合を除いても「入学してから困らないように」という思いやりを、教科学習に結んだり、集団生活の面に結んでいるようである。

前者の場合を、文字学習のことに関係してみると、幼児に、「文字を教えてみると、どんどんおぼえてしまうのだから、少しでも多く、一日も早く読めるようにしておいた方が、子どもはらくだ」と考える親が多い。これに対し「幼稚園は、文字を教えるところではない、もっぱら、話したり聞いたり、絵をみて話したり」するところという強い信念を持っていて、絶対にそれに触れないでおくべきだとする人もある。

また、これらの中間をいって「きかれたら教えてやる」とか「おぼえていく子はそれでよい」とする折衷派というか自然派とか、いわば弾力性をもった考え方をする人もあるわけである。

しかし、大半の親たちは入学以前に文字を教えているようである。この点を、小学校ではどう考えているか。新入生の中には、幼稚園を通じて来ない子もいるし、家庭でも教えないでおいの子もいるのだから、そして、一斉に指導するとすれば「拾い読み」程度のことなら幼稚園時代にとくに取り上げなくても小学校に来てから十分間に合うと考えている。もちろん小学校では、新入生に対して、文字に関する実態調査をして、個々の子ども能力を把握して、その上で指導の計画を立てようとしている。したがって、「自分の名前が読める程度に」というのが一般的な要求なのである。

文字以外のものでも、教科に関係するようなことは、あまり気にしないでよいであろう。基本的な習慣や、集団生活や社会性などは、その子の年齢に合わせて指導してきたのであるが個人差があって完全というわけにはいかないであろう。このように、保育結果について、いまここでどうこういっても、どうにもならないであろう。

では何をしてやればよいか。

一般的に、幼稚園と小学校との連絡は、あまり密接ではないよう

である。しかし幼稚園は小学校の予備校ではないにしても、そこを通っていく子どもは別人ではないのだから、やがて成長して必ず入学する小学校雰囲気と接しておくことは大切なことだし、小学校側からみても、やがて迎える幼稚園の子どもの状態を知っておくことも望ましいことである。

そこで、小学校によっては、地域の幼稚園とよく連絡をとりとうと努力している。例えば、運動会に番外出場をもらったり、学芸会に招待したり、展覧会に特別出品をもらったりして、常々いろいろと気を配っているのである。

当該小学校に附属した幼稚園をもっているところは別として、新入生のために「一日入学」ということをしているところがある。これは新入生が、できるだけスムーズに適應するために、一日学校に来て、小学生が学習している様子を見たり、小学生と歌をいっしょに歌ったり、運動したり、学校の設備をみたりするのである。

このようなことは、一日だけでなくてもよい。二度でも三度でもよいであろう。しかも、幼稚園から小学校に申し込んで、そのような機会をつくってもらってはどうかであろうか。

もっとも、都会地では、幼稚園と同学区内の小学校に全員必ず入学するとは決っていないので、そこまでするわけにはいかないといえるかも知れないが、幼稚園側の一計画として、小学校は、どんななどこ

ろで、い、ようという単元でその学校に入学すると否とに拘わらず、「一日入学」の経験を全員にもたせるのがよいのではないかと考える。

次は、あまりにも普通のことであるが、指導要録の早期転送ということがある。

すなわち、園児の一人ひとりについての観察事項やテストの結果などを、入学以前に小学校に送っておくことがよいのである。

小学校では、幼稚園から送られた記録を参考に、計画的に指導することが一層子どもの幸せだと考えているからである。

ところが、小学校によっては、新入生の中には幼稚園にいかなくった子どももいるので、一応「白紙の状態」にもどして、何の先入観も持たずに、新しい眼で接した方がよいとするところもある。

このことは、親も同感する場合がある。

しかし、子どもを理解する上で、子どもの生育歴が大切であると、同様に、保育歴も必要だし、そこでの観察記録などは、よしんば、多少の主観的なことが交って記入されたとしても、その子の生長や生活ぶりや、性格を重視する教育では得がたい資料となるのである。

そこで、ケースについては、できるだけ詳しく具体的に記入していただいて、それを入学以前に小学校にとどくようにご配慮願いたいというわけである。

このようなことは、万事多端な学年末にはふさわしくないことであるから、あるいは無理な注文になるかもしれない。

次は、親たちとの話し合いである。

学年末であるから、個人的に面接する機会もあって面倒であるが、「入学期を控えて」という主題で特設してはどうであろうか。

この話し合いでは、一般的な諸注意事項が当然でてくるであろうが、それとともに、親の心がまえといったことにもふれていただきたいのである。

第一は、小学校入学ということが、子どもにとって大きい動機づけになるということを考えてもらいたい。

子どもにとって、「学校にいくのだ」という喜びは大へんなものである。その喜びを、そのまま元気づけてやれたらいいなと思うのである。その喜びを大事にしてやってほしいと思うのである。

学校はたのしいところだとか、こわいところだとか考える以前に、この喜びをそのまま親のものにしたいというのである。

「こんなで、みんなといっしょにやっていけるだろうか」とか、「いじめられやしないだろうか」だとか、さまざまな心配をさきに出していかない方がよいように思う。取り越し苦労をしすぎないのがよいのである。取り越し苦労が進んでくると、「先生に叱

られないように」とか「ボンヤリしていないで」とかいう不安めいた注意を新人生に与えてしまうのである。もっと強いものになると「誰にも負けないように」ということになって、さながら選手を送り出すような掛け声に変らぬとも限らない状況である。子どもは、学校にいかないうちに、緊張した気分になってしまふのである。

小学校では、幼稚園から入学してきて、まだ基本的な習慣さえできていない子がいたり、友だちと遊べない子がいたり、テストで疲れきって神経質になっている子がいたり、そのほかさまざまな子どもがいることをよく承知しているし、新入で張りきってくる子どもたちの喜びをそのまま元気づけるように取り扱うことにしているのである。そこで、子どもの入学に対する喜びそのものを、そのままに認めていこうとしたのである。

ここで、親たちの神経質といわれるまでに心配する気持ちを鎮めて、子どもといっしょに入学の喜びに転ずるよう希望しているのである。昨今は、本当にいわゆる教育ママさんが多くて、教育に熱心なことは望ましいにちがいないが、ともすると、子どもを一時的な叱責で意のままにすることができると過信したり、饒舌に近い注意のコトバを浴せかけて、それで「いい子」になると思ったりすることがあるのである。ところが、叱責や饒舌は過保護と同じように、子どもを無気力にしたり、時には神経質にしたりしないとも限らな

いことを悟らせてあげたいのである。

そして、これは第二の内容になるのであるが、親たちも、子どもといっしょに勉強していただきたい。といってもここでの勉強は、子どもの学習の内容と同じことを対象としていない。それは、子どもを理解することを学び、同時に親自身を知ることだといっては抽象に過ぎるであろうか。

とにかく、両親も明るい、調和のとれた気分で、親切にあふれた生活をするのが肝要であるとだけつけ加えさせていただく。

上記のような内容を、話し合いの中に織り込んでいったらよいのではないだろうか。

さて、極くありふれたことどもを書き連らねてしまつて甚だ恐縮に思うのであるが、入学期を控えた幼稚園に、何をしたらよいかという課題に対して一通り、平常大切だと思つていることについて、若干のべた。しかし、これが総てではない。もっと大切なことが多々あるであろう。子どものために例えばいろいろ記念になるような、お祝いになるような催しも計画されていることであろう。

願わくば、どの子ども元氣いっぱい喜び勇んで入学していくように助勢せられんことを。